九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 「領域性」に関する研究ノート

遠城, 明雄
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/1955678

出版情報：史淵. 130, pp.31-69, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 「領域性」に関する研究ノート

遠　城　明　雄

## はじめに

「領域性（territoiralité）」に関しては主に動物行動学からの影響によって、地理学をはじめとした人文・社会科学において多くの研究がなされてきており、アングローサクソン圏の地理学において「日常生活空間」といった比較的ミクロな次元や国家の次元を中心に研究が展開されてきた[1)]。しかしながらこうした潮流に対して、70年代後半から領域性を別の問題設定から論じようとする議論が地理学のなかでみられるようになった。そこで小稿ではそのひとりであるラフェスタン（Raffestin）らの基本的問題設定[2)]と「領域（性）」概念を検討し、その意味と射程について考えてみたい。

ところでラフェスタンによると、アングローサクソン圏における領域（性）研究は動物行動学からのアナロジー[3)]としての色彩が濃く、人間の領域性の「種別性」を把握するという点で必ずしも十分な考慮がなされてこなかったと判断される[4)]。例えば、「領域性は社会的活動の全てのスケールで人間の行動を条件付ける」というソージャ（Soja）の主張を正当なものとして認めるが、領域を占拠者によって排他的に区別される影響圏とし、その３つの構成要素－空間的な帰属感、排他性、人間の相互作用－を列挙するソージャの説明は適切な仕方で領域性を問題化することに成功していないとされる。人間の在り方が「動物性」という性格を含んでいることはむろんであるが、人間の領域性が内因的組織と同時にその欠如を補うものとしての外因的組織－言語的あるいは非言語的道具の体系－に媒介される点を強調するラフェスタン[5)]はソージャにみられる主

観的なものと非主観的なものの混同を疑問視し、領域を社会の同質化につながりやすい「帰属意識」の問題と切り離して論じるべきであると主張する。また同一の脈絡からホールやモルら[6]の領域（性）概念に関しても、その一定の有効性を認めるものの、それが個人的あるいは状況的（situationist）である点が批判されることになる。

以下では最初にラフェスタンらの認識論的問題への関心を検討し、次にその「領域性」をめぐる主張をみることにしたい。

## I　「問題設定」と「認識」をめぐる諸問題

ひとつの科学においてある問題が検討される場合に、その問題を問うことを可能している「問題設定（problématique）」自体を絶えず明示化することで、自らの問いの可能性／不可能性を知る作業が重要な意味を有する。ここで問題設定とは「分析全体に先行して組織化されている体系の存在を理解可能にする、知ることができること（intelligibilité）の位置を決定する手続き／過程である」[7]。

ラフェスタンは地理学を構成している基本的問題設定と説明を四つに区別する[8]。それは暗示的（implicite）／明示的（explicite）な伝統的問題設定と暗示的／明示的な批判的問題設定である。このうち暗示的な伝統的問題設定には「古典地理学」が、明示的なそれには「新しい地理学（理論・計量地理学）」がそれぞれ対応するが、この二つの地理学はシステムの合理性だけに関わる機能的情報を優越化し伝達しようとする点で共通しているとされる。それではこの伝統的問題設定の中での相違はどこに求められるのだろうか。それは古典地理学と新しい地理学が使用する「言語」の相違という点である。つまり古典地理学が専ら「自然言語」に依拠しており、我々に常にある内示（connotation）を暗黙のうちに強いるのに対して、理論・計量地理学は日常言語とは切り離された関係のシステムである「論理的・数学的言語」を利用しており、物と言葉の一致に基いていた前者－観念（notion）－からひとつの構築物である概念（concept）への移行として肯定的に評価される[9]。但し観察の「理論負荷性」といったことからも明らかなように「科学言語」は日常言語から完全に切り離されるのでは

なく、後者は前者の前提として位置付けられ、また両者は実在の要素システムの対応的な指示として言語を定位するという共通点を有していると考えられる。したがって問題は使用する言語の交代ということだけでなく、ある社会のなかで言説がいかにして構成され、どのような力関係がそこに生じているのかを明らかにする点にある。なぜなら言語は媒介のための単なる中立的道具などではなく、「社会的なもの」それ自体の一部を構成する「行為」であり、とりわけ「近代」においては知（savoir）と欲望（vouloir）と権力（pouvoir）という三角形が形成され、その編制の下でそれにふさわしい言語が編み出されるからである[10]。「科学言語」は日常言語に比べて「実在」をより正確に指示し、普遍的な「真理」への接近を可能にしたという意味で「成功」したわけではなく、ある事象が「真」であるかどうかはあくまでも現在の我々の関心＝利益に結びついた形でのみ評価される点に注意しなければならない。そして我々もこの言語を日常生活のなかで「自明のもの」として積極的に担い、その「恩恵」を享受することによって、世界の別の在り方の可能性を「共同」で否定／排除しているのであり、世界に対するある信頼が信頼の体系にのみ依拠している点で、この世界は回帰的－円環的に閉ざされているといえる。

以上のことから「理論・計量地理学」は、地理学的認識の終点ではなく端緒に「抽象化」を位置付けたという点においてのみヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュなどの「古い実証主義地理学」を革新することに「成功」したといえる。つまりこの「新しい地理学」は地理学の研究対象を「脱－物質化（dé-matérialisation）」することで、意識しないにもかかわらず伝統的地理学の知を基礎付けていた「現実」とその現象的形態の一致という考えに疑問を投げかけ、「潜在的構造（structure latente）」の探究へと関心を向けるようになった。現象の背後にある因果関係の解明という認識は、科学言語の円環的な複雑化と一方的な特権化につながる場合があるが、こうした研究対象の位置の変更が逆説的に「人文主義地理学」を中心にした「主体（sujet）」の位置をめぐる議論を惹起する潜在的な下地になったという評価もある。確かに「論理実証主義」のなかにそれを批判する萌芽が既に孕まれており、実在論／反実在論をめ

ぐる議論は今日、諸科学に少なからぬ影響を及ぼしている[11]が、地理学においてはこうした認識論的問題への関心が総じて希薄であった[12]といえるかもしれない。例えば世界を幾何学・数学的モデルに還元するという考えは、第一に世界が秩序付けられていること、第二に世界の秩序は必然的に幾何学と数学に反映されることという二つの信念体系を前提としてはじめて可能になると考えられるが、理論・計量地理学がこの問題を科学外（extra-scientifique）的問題として地理学から除外している点[13]などは、観察事実に特権的な優位を与える「現象主義」を端的に表わしている。

両義的にではあるが地理学に方法論的のみならず認識論的省察をも促した「理論・計量地理学」それ自体に対する認識論的反省を深めるなかで、ラフェスタンらは「批判的パラダイム」の再生を目指すと同時に、他方で科学の「透明性」の要請に応えるためにそれ自体が歴史的であることを避けえないにもかかわらず、「公理」に基づくことの有効性を承認する[14]。例えばラシーヌ（Racine）[15]は、地理学的言説のイデオロギー性を問題にし、言語と問題設定のそれぞれの水準を踏まえて、現象間に見出される規制性の発見が現状維持の追認に終わる危険性を指摘しており、そこでは地理学的試みが「政治的なもの」と無関係でありえないことが承認されねばならなくなる。よって世界を「変換」することこそが問題であるという意味が込められている「批判的」問題設定[16]の模索とそれへの移行が次の大きな課題となるが、生産主義的合理性とそれを条件づけるとともに拘束するものでもある等質空間＝「近代国家」への批判がこの問題設定の出発点を形づくる。それはブンゲ（Bunge）の実践やハーヴェイなどの研究によって明示化されつつあったが、1976年の段階では大部分が暗示的なものに留まっていた[17]。

さて以上の議論において注目されるのは、素朴な経験主義とそれを支える主観（体）－客観（体）の区別という従来の認識論的図式への批判が含まれている点である。

ラフェスタンは、パトナムの「形而上学的実在論（世界は精神から独立した客体の集合から構成される）」と「内部実在論（世界を構成する対象はある理

論あるいは記述のなかにおいてのみ意味を有する)」の区別を援用しながら、1965年から1975年にかけて地理学において前者から後者への立場の変更が生じたと考える[18]。古典地理学の企図は、世界が精神から独立した対象の集合によって構成されているという立場のもとで発展してきたが、計量・理論地理学を媒介にしたラフェスタンの立場では「具体的空間（生態的あるいは地理的）への関係は常に抽象的空間（社会）によって媒介されて」[19]おり、したがって「客観的現実は我々の構築物の外に存在しない」[20]という命題に依拠することになる。「対象は概念枠から独立して存在しない。我々が記述の枠組を導入するので世界を諸対象に切り取るのは我々である。対象も記号も記述の枠組の内部にあるので、それぞれに対応することを語ることができる」[21]というパトナムの言葉を引用してラフェスタンは自らの立場を説明しているが、この立場は「すべての対象が言説の対象として構成されるという事実は思考に外的な世界があるかどうかという実在論／観念論の対立とはなんの関わりもない。……否定されるのはそうした対象が思考に外的に実在するということではなく、それがあらゆる言説的出現条件の外側で自己構成されないという少し別個の主張なのである」[22]ことを確認しておく必要がある。

しかしながらこうした議論を踏まえるとともに、ラフェスタンらは地理学者が常に以下のパラドクス的状況に位置付けられていることにも注意を促す。つまり「認識に対する存在の優越（primat de l'etre sur le connaître）」[23]を認めつつ、他方でその「記述」が言語を通してのみ意味をもつことから言語を操作しなければならないということである。この点から認識とその「前提条件」としての存在の緊張に満ちた「はざま」を、「地理性（Géographicité）」という言葉で捉えようと試みた地理学者ダルデル（E. Dardel）の試みが再評価されることになる[24]。「未知のものを認識し、接近しえないものに到達するという地理的不安（l'inquiétude）は客観的科学に先立ちそれを支えている。故郷への愛あるいは生活環境の変化の探究、人間と大地の間に結ばれたひとつの具体的な関係、その存在と運命の様式としての人間の地理性（Géographicité）」[25]から地理学の理論は出発されねばならないとラフェスタンは考えるが、それは認識をはみだ

していく「経験」－それもひとつの認識を通したものでしかありえないが－に晒されることによって、絶えず自分自身の認識を反省しその理解の枠組をずらして拡大していくひとつの「態度」であると同時に、反省しえないその限界を既に体験してしまっていることでもあり、このような「態度」が相互に交叉しあう場所で生じる従来とは異なる普遍－側面的普遍（un universel lateral）[26]－が問題になる。

このような認識論的立場の転換を踏まえて、ラフェスタンは「地理（学）（geografia）」という言葉に関して以下のような絶対的区別を導入する[27]。つまり都市、地域やカルティエなどの「具体的実在」であり狭義の生産された空間を「地理的構造（Geostruttura）」、それを表象するために作用する記号の全体を「メタ地理学（Metageografia）」、このメタ地理学によって生みだされた「生産物」を「地理的文法（Geogramma）」と呼称し、それぞれの水準は絶対的に区別されることになる。ここで各々の水準は生産様式、記号システム、イデオロギーというより一般的な水準の区別に対応している[28]。なおラフェスタンは「生産様式」を専ら生産諸力と生産諸関係としてのみ把握する立場を取るようであるが、むしろ狭義の「経済」に固有の機能を付与するものとして、「政治」や「文化」も内包したものとして生産様式を把握するほうが適切であり、ラフェスタン自身の議論にも即しているように思われる。

こうした絶対的区別を導入することは、従来の地理学においてこの同質ではない三つの水準が「地理（学）」という言葉によって強制的に同質化されてきたことを明らかにする点で意味をもつ。この三つの水準は、相互依存的であると同時に様相の異なる物質性を帯びている点で相対的に自律しており、ある水準が別の水準に還元／同質化されることで多くの混乱が生じることになった。特に「メタ地理学」の「自然化（naturalizazzione）」[29]は大きな問題を孕んでいる。なぜなら個々人の視点や営為の転換という問題に還元されない独自の位置を占めているメタ地理学は、ある「社会性」を帯びており、この点が考慮されないとひとつの認識の「歴史性」の否定－認識の「自然化」－に陥ることになるから。研究者は歴史的な生産物であるメタ地理学に依存することで、あくま

でもその枠内での「主体」として現象に接近するのである。ある地理的文法が生産される過程は、同時にそれを作り出すメタ地理学自体も絶えず変形される過程であり、メタ地理学も地理的文法も決して固定化したものではないことが確認されねばならない。

この「自然化」の過程を通じてイデオロギー作用は大きな役割を果たすが、上述したように科学もこの作用と無縁ではない。なぜなら科学は当該の社会を構成する下位集合であり、その社会の「再生産」にとって種別的な契機として一定の役割を演じるからである。「地理学的視点は目の前の現実によって条件づけられているのではなく、社会が重要であり意味があると考えたことのひとつの機能であり」[30]、一科学である地理学は、それ自体でそれによって現実の一部が構成されている点で自己言及的である。地理学は既存の生産様式から生じる「地理的構造」を正当化し承認することであり、その社会の内部に合意を育むことに貢献する可能性をもつのであり、ひとつの構築物である地理的文法はイデオロギー[31]として位置付けられることになる。よって「科学的真理」や科学の「成功」といった問題は、絶対的なものから相対的なものへとその位置付けが転換されねばならない。但し「再生産」の立場に立つことは困難ではあるが、逆にそれを自明視することは、一面では「社会」を機能主義的に自律したものとして、また目的論的に統合されるものとして、理解する危険性を伴うことになるわけで、この論点に関してラフェスタンは自らの立場を必ずしも明確にしていないように思われる。

それでは上記の議論の帰結として、地理学の「理論的対象」はなにに求められるであろうか。ラフェスタンはプリエトの「人間科学とはまさしくその対象が物的現実という自然的な現実に由来するのではなく物的現実の認識が構成している歴史的現実に由来するような（科学的）認識なのである」[32]という定義から、地理学の理論的対象は「空間」と呼ばれる「現実（réel)」ではなく、「領域」と呼称されるものを生産する過程であると位置付ける。つまり「地理学の研究対象は空間ではなくて、我々が空間と呼ぶこの現実に対する慣習的活動（pratique）（と認識の総体）（括弧内は著者）である」[33]。

「空間の読解者である地理学者は次のことに徐々に気付きはじめている。つまりその研究対象は 'それ自体' として認識されるような物質的あるいは社会的空間においてではなくて、この現実についての認識、そこに生きる人々によって構成され、同時に歴史性を見出す認識においてある全てであり」[34]、人文地理学はある認識の対象から形成される現実である「エクメーネ」と慣習的行動に基づく「エクメーネ」の認識から区別される「エクメーネ」の認識の認識として定位される[35]。このように「二重の解釈学」[36]として人文地理学を位置付けることは、「物質性」や「行為」という概念の再考を促し、それに応じて従来とは異なった研究アプローチを要請することになる。

以下では最初に古典地理学の問題設定に基づき構成されていた「景観(paysage)」概念との対比によって、ラフェスタンらの「領域性」概念を素描することから始めたい。

## Ⅱ 「領域(性)」のパラダイム

### (1) 「景観」と「領域性」

景観とは「集団がその労働によって現実化する社会的行為を時間と空間へ投射(projection)」[37]することによって作り出されるものであり、人間による物質的環境の制御という機能的側面と人間の支配ー被支配関係という政治ー経済側面とを同時に示している。以上の意味で二重の暴力の具現化といえる景観は人間ー労働ー社会の関係によって規定されるため、表面上の連続性とは異なり絶えず変化する不安定なものである。

ところで従来の地理学の問題設定では景観のこうした特徴が十分に検討されてきたとは言い難く、逆に「景観」をめぐる問題設定はこうした諸側面を論じる際に障害にさえなっていたといえるのではないだろうか。但し景観概念をめぐっては様々な分野で多くの議論があり、ラフェスタンの景観の地理学批判に対する私の判断はそれらを十分に検討したものではないことをお断りしておきたい[38]。

それでは「景観」の地理学の問題設定と「領域性」の地理学のそれにはどの

ような相違点があるのだろうか。それは「地理的構造」を写し出す言語の相違に求められるが、「景観」の言語は形態－機能的な問題設定に依っており、《視ること（vu)》を表象するのに対して、「領域性」の言語は関係的な問題設定に依拠し、《生きられること（vécu)》を表象するとされる[39]。但し両者は対立するわけではなく、記号論的に後者の関係は前者を内包するものとして位置付けられる。西ヨーロッパにおいては16世紀以降、「視線」への優越性が確立されることになるが、それは体験されたこと、つまり多くの場合に諸個人間あるいは諸集団間での不均衡な関係によって形成される領域性の異質性を隠蔽する事態を伴っている。特に古典地理学は可視的で観察可能な対象にのみ関わることで、つまり対象の「明証性」に囚われることで、観察道具として「目」を特権化し、ひとつの「まなざし」を編制してきたといえる[40]。その機能がもはや内示（connotation）を失っているにもかかわらず、形態の外示（denotation）によってイデオロギー的に現実に回復される点で、例えば、「農業景観」という「地理的文法」は、一方でその景観がもはや人間の有機的労働によってではなく、工業社会のコードによって規定されていることをみえなくさせ、他方で「都市化」の進展した時代において「自然」の回復や「秩序」を強調する政治－社会的な役割を担うことにもなる[41]。

「生きられている」対称的／非対称的諸関係を隠蔽する「景観」概念が、同時に社会の中心に位置しそれを支配する成人男性の視点を意識／無意識のうちに特権化することになるのは当然であるといえよう。これに対して「領域性」概念は、女性、子供、老人といった成人男性にとって「他者（l'Autre)」の立場にある人々の認識や体験を綿密に記述するように努めねばならず、相対的差異の絶対性に関心が寄せられることになる。なおこの点でルネ・ロッシュファール（Rochefort）のシチリア島民研究が先駆的な研究として評価されている。

以上のように領域性概念は景観概念への反省から、「景観」によって隠蔽され、また汲みつくされなかった社会の別の側面を照しだすパラダイム[42]として構想されているといえる。

## (2) 「領域性」の諸要素

### (a) 「領域化」の過程－労働（エネルギー・情報）と記号－

地理学の理論的対象を、自然と人間の交互的な交換の過程の連続として把握するラフェスタンの立場は、「空間」と「領域」に明確な区別を導入していた。「空間」は、「領域」に先行した位置を占めるもので、ルフェーブルの表現を用いると人間にとって「始源の監獄（prison originelle）」[43]であり、人間の全ての活動を規定づける様相の異なる「物質性」として考えられる。これに対して「領域」はひとつの対象（object）というよりもむしろ、人間と自然の間の基底的な媒介である「労働」によって、絶えず一定の重層的な時間の階層に応じて変換されるひとつの永続的な「過程」であり、社会環境によって条件付けられた歴史的な慣習行動が作り出す「監獄」である[44]。このような空間から領域への不確実な変換過程の総体は「生態形成（l'écogénesè）」と呼称されているが、人間は労働によって対自然な関係と同時にその対個人－社会関係をも変換するのであり、この二重の意味で労働という普遍的な媒介は、自然と文化の界面（interface）の歴史を表わしている。労働はエネルギーと情報という相互に区別されるが不可分な二つの要素の結合であり、遺伝的コードのほかに社会的・文化的なコードが付加されている歴史的形成物である[45]。

ところで人間の身体はフェノタイプ的（phenotypique）[46]な道具（insturment）である《内方的（endosomatiques）》として形容される諸器官の全体からなるが、人間はこれに加えて理論的には無限定な一連の《外方的（exosomatiques）》な道具を発達させてきた。「土地」はこの外方的な道具によって構成されており、この意味で領域それ自体がマクロな外方的道具といえる[47]。生活のための必須の手段である道具の作成という「創造的不幸」は、人間の身体的組織の制約に起因しているが、人間という「受苦的存在」は受苦的であるがゆえに逆に情熱的なのであり、ある対象に向って努力するという情熱を有するのである[48]。

領域を生産する人間の振舞は、労働に基礎づけられながらもそれに限定され

ない様々な力と行為の複雑な結合であり、人間は意味と価値を備えている情報の集積でもある。したがってある文化に内属させられている人間が持つより広範な情報システムにおいて求められる秩序化が、領域の形成に関わるのであり、それは外部と内部の境界設定やその変換を可能にする「記号的領野（semiosphere）」として外部との関係において選択的な役割を果たすことなる[49]。人間は遅延された行為の意識として定義される手と脳との間のダイアローグを通して、《私》の《私》に対するコミュニケーションを可能にする最初の道具である言語（langue）[50]を獲得する。そして言語的・非言語的な様々な道具によって構成された情報を通してのみ自らの構造を維持するのであり、遺伝的情報レベルでの免疫反応から個人、社会集団に至るまで内部と外部との具体的・抽象的な境界設定が問題になる。「混沌に魂を与えること、無秩序を情報に変換すること、地球の表面を変換すること」[51]が人間の生活にとって不可欠であるが、外部で生じることの全てが領域の生産のための変換の対象となるわけではなく、それはある機能とイデオロギーの顕在化である「記号」によって媒介されているのである。この点で領域的な生態形成は空間の記号化（semiotisation）の過程として考えることができるが、それはものとの関係であると同時に、行為者が一定のコードに従って情報を含んだメッセージを他の単数または複数の行為者に送付する相互関係も意味している。人間は自らの周囲の三つの環境（生態的、動物的、社会的）を変換・潜在化し、それとの差異を、複雑性を「縮減」した状態で維持することによってはじめてある「主体」として形成されるのである。ただこの「主体化」の過程は決して安定することはなく永続的な闘争であるといえる。

以上のことから非常に簡潔ではあるが、人間の「領域性」は具体的・抽象的な媒介物を通して集合体あるいは個人などの諸主体が、「外部性（l'extériorite）」（と「他者性（l'altérite）」）と維持する諸関係のシステムとして定義される。ここで「外部性」とは、場所（topie）や他者など私ないしは我々ではない自然的／人間的、有機的／無機的なものの全体であり、さらには言語や貨幣のような抽象的体系や諸制度への関係なども含んでいる。この諸関係は非常に複雑

であるが、ほとんどの場合にそれは非対称的であり、対称的関係が形成されるのは稀である。よってこうした諸関係を問題化する場合に、言い古されているが、我々の日常生活を支えている可視的で具体的な領域と直接には視ることのできない抽象的な領域の関係の分析が問題になる。行為の結果であると同時に条件でもある具体的領域は地理学的な階層システムにおいて提示され、属性の集合によって特徴づけられるのに対して、抽象的領域は持続する時間（durées）によって特徴づけられる使用頻度の体系において提示される[52]。

但しこのような内部と外部の差異化という問題設定は、既にサイバネティックスなどで指摘されている「自己言及性」の問題や免疫不全といった問題との関連で再考する必要があろう。

全ての社会は存続していくために、行為の操作的な場（champ）を組織化することを免れない。この際に行為者は様々な階層で環境に対して自らを保持し、また行為するための不可欠の道具として、網目（maillages）、結節点（noeuds）、ネットワーク（réseaux）という三要素によって階層的な領域的生産を編制し固有の自律性を獲得すると考えられる。それぞれは、面、点、線という要素に一般化できるが、社会の自律性が当該社会に不可欠な資源の管理に依拠している点で、生活手段の生産である領域的生産は各時代ごとに異なった形式／形態として現出する[53]。領域的生産のいくつかの段階をみると、資源の貯蔵の可能性と農業革命、口承に対する書字の優越とそれに基づく情報の一点への集中などによって結節点である都市が現出したことや産業革命以後に境界（limite）によって確定された網目から都市に代表される結節点の相対的重要性が増したことなどが、画期として挙げられる。さらに今日では情報のコミュニケーションネットワークをいかにして制御するかが、ある社会の自律性を維持するうえで大きな問題になってきており、どの領域的要素が強調されるかは時代によって異なる。特にネットワークの発達によって社会はその固有の自律性を獲得するが、逆にその自律性の危機を招来することにもなる。例えば、ある領域がその領域内に立地していない多国籍企業によって情報を統制される場合に、この領域内の行為者が「他律的」な立場にあるといった事態は今日、世界的に広がっ

ている現象といえよう。

領域という関係のシステムにおいては情報とエネルギーが絶えず交換されているが、このシステムは情報の非対称的交換や変動、それに伴って生じる内部と外部の差異の喪失の危機によって絶えず変動している[54]。技術的革新とその拡散および受容といった新たな意味内容の情報循環の発生と従来の情報の旧式化などの変化に従って安定化されることはないこの過程は、領域化（territorisation）・脱領域化（deterritorisation）・再領域化（reterritorisation）として把握されるが、現実には脱領域化、再領域化が繰り返されることになる[55]。

ところで近年、地理学においても「行為論」[56]への関心が高まっていることは周知であろう。それは単に行為論を地理学に導入することにとどまらず、地表の配置構造や「資源」獲得といった論点を付加することで行為論の再構築に寄与する目的を持っているが、領域の地理学も人間の社会的行為に分析のひとつの焦点を当てていることは上記の議論から明らかである。後述する慣習的行動と認識のずれといった問題は主体的行為の位置付けに直接的に関わるが、ここでは主体的行為者それ自体の概念化－例えば、実践的知識と言説的知識の区別－といった方向性ではなく、行為の再考は地理学的概念としての縮尺／階層（echelle）の問題[57]へと関係づけられている。観察者としての地理学者が設定する階層の相違が研究対象に影響を及ぼさないという要素主義的な考えに対して、階層間の還元とは異なる階層間の再帰的な相互関係が行為をいかに媒介しているかがひとつの重要な問題になる。

ラフェスタンはウッシー（Hussy）に依拠して、主体（sujet）を大きく整備者（aménageur）と使用者（usager）に区別する[58]が、この場合に両者が認識の点で相違していることが重要である。すなわち前者の対象が財やサービスを生産するために変換の実践を行なう空間の一部であるのに対して、後者のそれはある操作を行なうための関与（pertinents）の手段としてある。こうした認識での相違は活動の面においては前者を経済的交換という社会的慣習行動に属させ、後者をこの「現実」の使用に属させることになる。両者内あるいは両者間の関連は多様な形態での労働、情報、エネルギーの流動のなかで統合されてい

るが、前者の空間的実践が「経済的審級（l'instance économique)」によって介在されているのに対して、後者の場合に政治・イデオロギー的な「社会構成体」によって基礎づけられており、特に諸々の「イデオロギー装置」の役割が重要になる。なぜならある生産物への目的的な関与が問題になる場合に、行為者が属している集団によってその使用の仕方が影響を受けること、また整備者の提供する生産物は既にその文化的コードによって種別化され、その規範体系によって枠づけられていることが問題になるからである。社会的な相互行為は領域の内容を生産するとともにそれをめぐる社会的役割を規定するという意味で相互依存的であるが、整備者の認識や科学的認識は使用者のそれに対して常に優越した位置にあり、多くの場合に諸行為者間での一方的な交渉という不均衡な関係が形成される。「集合的消費」をめぐる議論でも明らかなように、生産物は一定の集合的行為を形成し、それに一定の方向を付与する役割を演じるのである。但し使用者は常に別なコードによって読解をおこない、それを変化させる潜勢力を有しているのであり、この意味で「再整備」の主体であるといったほうが適切であろう。

ウッシーは「生態形成」を、空間の編成（aménagement）と社会的諸関係の編成の蓄積的過程であり、この編成をめぐる闘争の社会－政治的過程として定位しており、同時に個人的主体から集合的主体にいたる様々なレベルで「主体」が形成されることになる。つまり社会－経済的な競争の過程で交換の成功によってある社会的地位を承認され、自己自身を実現する整備者としての主体、また整備された場所に対して、社会的規範を操作することである社会的地位を獲得する使用者としての主体、さらには空間の編成をめぐって社会生活を組織づけることができる相対的に自律的な第三の「公共的な」集合的主体の認識などの生成過程である[59]。

なおこのような主体の区別は、ド・セルトによる都市に関わる実践[60]の区別に類似している。ド・セルトは都市の実践を都市計画家に代表される言説と現実に「歩く」という行為によってこの都市を読解し生きるという日常的活動の二つに大別し、前者が鳥瞰的／一望的性質を有しているのに対して、後者はそ

うした「透明性」の要求を逃れていく振舞としてその可能性を評価している。但し後者の所為には透明化を逃れるだけではなく、空間の獲得をめぐって行為者間の対立も含まれていることはいうまでもない。

以下ではこうした主張を受けつつ「領域化」を別の概念装置から説明するトゥルコ（Turco）の議論について簡単に触れておきたい。

(b)　「領域」と「複雑性（complessità）」

地理学を「社会的行為の領域形態（forma territoriale dell'azione sociale）」[61]として再定位するトゥルコの試みは、「集合的振舞（agire collective）」によって地表上に領域が生成されていく過程を問題にする点でラフェスタンと同一の基盤に立っている。

トゥルコは「人間」の位置をめぐってゲーレンの「ここと今」という直接性からの「負担免除（esonero）」による積極性の獲得という議論[62]やヴァンドリエ（Vendryès）の生理学的自律性と知的能力の自律性の区別による概念化能力の強調といった人間学の議論を参照しながら、「自己に関係する自己」として、意識に加えて「自己意識（autocoscenza）」を有する点に「人間」の特異性を求める。

次に社会は、ある企図（projetto）／権力関係／利用可能な人的・物質的資源の様々な接合（articolazioni）において構成されるものと理解される。これらの諸要素が社会的に再生産される場合にイデオロギーが重要な役割を果たすが、例えば、伝統、神話、宗教などの形而上的な「貯蔵庫」に依拠する制御装置（Dispositivo di controllo）は、領域を編制する多様な慣習的振舞に一定の方向性を付与するのである[63]。

人間－社会のこうした把握に基づいて「領域化」は社会的・領域的振舞（agire territoriale）という観点から検討されるが、その際にもうひとつの鍵概念としてルーマンの「複雑性（complessità）」概念が導入される[64]。

あるシステムはそれ自体とそれ以外の環境の間の境界設定によって作り出されるが、その境界は両者の「複雑性」の差異によって成立する。システムは、その要素の全体、関係の全体、システムの存続という目的性（Finalità）の全体

という三水準て定義され、情報の流動（含むノイズ）を統合する力を有している点で認知的には環境に対して開いているが、その固有性／一貫性の契機を外部とは無関係にそれ自体で維持する点で規範的には環境に対して閉じている。つまりシステムは構成要素間の相互作用を通して、自らが生産する関係のネットワークを再生するという意味で循環的なのであり、環境との関係はそのシステムの同一性に対して必然的ではない。よって「オートポイエーシス」として概念化されるこのシステムはその同一性を維持する以外の目的が不在なシステムであるといえる。

ではこうしたシステムの「合理性」とはなんであろうか。システムはいかにして環境との間に境界を画定し、環境に対してその自律性を維持しているのだろうか。あるシステムが自らの同一性を維持し安定化するためには、複雑で変動する環境と一定の格差を作り出して内部と外部を分離することが必要であり、この差異が「複雑性の縮減（riduzione de complessità）」と呼ばれるものである。このような縮減は、複雑性を破壊してしまうことでなく、あくまでも過剰な複雑性を中和化－可能性の潜在化－することを意味しており、行為と経験の「偶有性（contingenza）」を限定することである。これに対してシステムと環境の複雑性の差異があまりにも大きくなると、僅かなノイズによってシステムは安定性を喪失し境界が消失してしまったり、また行為の「自律性」を高めるためには逆に複雑性をできるだけ増幅し偶然性（aleatorietà）を創出することが求められるので、システム的な意味で複雑性の拡大が必要になる。こうした要求に対して行為者は人工物を増大するのみならず、人工物が組込まれている過程間の相互作用を増やすことで複雑性を増幅し対処することになる。

したがって行為は常に変動する複雑性を縮減すると同時に増幅するという両価性を有し、そのなかで重層的に決定されるのであり、行為の顕在態と潜在態のずれが複雑性として把握される。社会的行為者（「地理的人間（l'homo geographicus）」）は、領域を生産し、利用し、この領域を通じて他の社会的行為者との諸関係を展開するが、領域形態は社会的行為によって生産された単なる結果にとどまらず、社会の再生産にとって種別的な一様相（modalità）とし

て役割を果たすと同時にそれへの足枷としても作用する点が重要であり、社会的合理性に対する領域的合理性の機能性をどのように評価するかが要件になる[65]。

以上の議論を踏まえて「領域化」の過程は次の三つの契機から説明される。つまり象徴的制御としての命名化（denominazione）、実践的制御としての物化（reificazione）、意味的制御としての構造化（strutturazione）のそれである。この三契機は時間的なものでも、単純なものからより精緻化されたものへという階層的なものでもなく、むしろ社会の「目的性」と関わる区別である。

第一に命名すること、あるいは指示（designatore）[66]はこの「私」が世界を言語的に構成することで世界それ自体を境界づけることに他ならない。この命名的行為は認知的側面をもつと同時に他の人々との社会的相互行為を前提したコミュニケーション的側面を有した社会的労働（lavoro sociale）である点が留意されねばならない。この境界づけられた世界の内部において、ある指示に含まれる情報は可変的であり、それが受容されるか否かは任意の「共同体」の「慣習」－より明示化された場合に「コード」－によって影響される。個別的に経験された命名が普遍的に用いられるようになるのはこのようなコード化を必要とするのである。但し情報が同意されるかどうかはあくまでも情報のメッセージの受け手側に依拠しているのであり、発信者は情報の受容の予期だけをもって行為するわけで、発信者と受信者の間には相補的な非対称的関係しか形成されないが、慣習に従うことでこうした関係は表面上消えてしまう。我々が同一の言語体系を有しているかどうかはアプリオリに確認されないことから常に「翻訳の不確定性」という問題がつきまとうことになる[67]。また植民地での地名改変に代表される一方的強制という場合もあり、過剰な世界の「もの（cose）」をひとつの名前に閉じ込め、その情報を縮小してコード化することは、様々な意味で権力（potere）が発生する場所でもあるといえる。

このような記号組織は幾つかの水準で分節化される。第一の水準は、命名することが行為者との関係で地表に言及対象（riferimento）を作り出す機能をもっていることに認められる。この言及対象的な命名は象徴的な統制を増加させる

点で解放的であるが、同時にこうした準拠が一度構築されるとそれは行為を方向付け、構造化することになるため人間自らが構築した牢獄になる。

他の水準として象徴的（simbolico）－遂行的（performativo）命名が区別される。前者はある社会的な価値に基づいた信念（credenza）を地表に投射することであり、この信念は伝統や神話といった社会の制御装置に依拠しており、社会的再生産においてイデオロギーを媒介する役割を果たす。これに対して後者は技術的な経験に依拠し、「科学的」に確認しうる情報を組織化する。前者の場合にこれを知りうる人－例えばシャーマンや王－がはじめから限られている点で「選別的」であるのに対して、後者の場合にその情報が誰にでも接近可能であるという点で、基本的にそれは肯定されるべきことであるが、逆に「差異的」であるといえる。そしてこのように伝達される多くの情報は変換され、徐々に散逸し最終的に消滅する。

第二の物化[68]は、行為者が、直面している地理的形態を「実際に」統制する過程である。自然の物質性から、構成された物質性が引き出されることで、規則のネットワークによって構成される志向性（intenzionalità）の世界が編制され、構成された物質性が新しく構成される物質性の前提条件になる。「物質」を作り出す過程は物質に自らを適合させると同時に物質を自らに適合させるという相補的だが矛盾する性質を有している。前者はシステムの同一性の危機を修正していく契機になるのに対して、後者の場合に物質に含まれる力の抑圧と「作成する知」の出現、その結果としての可視的人工物の形成は、物質を構成する行為をルーティン化すると同時に、構成された物質上での行為を一定の方向に制約するという二重の意味で、行為の物質への反復可能性（replicabilità）の確保を意味しており、行為は永続的にではないが制度化されることになる。後者の側面は、物化する振舞が対自然的であると同時に社会的企図でもあることを示しており、諸行為者の物化する振舞とそれを規制化する規範および法（diritto）などのイデオロギー的な装置との交互的で〈循環的な〉結びつきが問題になるが、例えば、グルー（Gourou）の〈生産の技術〉と〈組織化の技術〉の区別にはそうした観点が既に提示されている。ここで資源が獲得され再分配

されるモードの多様化に伴って、社会的企図はむしろ行為者間の敵対や矛盾を和らげる媒介として機能するようになる。

第三に構造化[69]とは、社会的コミュニケーションを行なう人間が「意味(senso)」の媒介によってある目的に沿ったプログラムを具体化するための操作的な場(campo)を形成する領域的振舞である。「意味」は複雑性を縮減すると同時に、与えられた体験に対して他の可能性への参照などを含み込んで、選択の場である環境の保存の操作化をおこなう縮減のひとつの契機であり[70]、領域を体系的に組織づけるものとして定義される。ある領域を成立させる可視的とも直線的ともかぎらないある幅をもった意味の境界は、より複雑性の高い環境と別の意味によって成立する領域の二つに関連して編制されるが、同一の空間上には意味の相違によって異なった領域が並存し、また階層的に積分されることになる[71]。なお意味は世界についての経験を意識的に精緻化し情報として受容するための形式であり、意味と情報は混同されない。

社会システム内のーシステムである領域的構造は、意味の生産によって階層性(ヒエラルヒー)を形成すると同時に非ー中心的な状態をも維持するという両価性を含みながら、領域的合理性に危機をもたらす乱雑さを可能なかぎり吸収する高い水準の多元的安定性(multistabilità)を獲得する。このような領域的構造は複雑な環境に対して自律性を保持するために、それ自体によって循環的に言及する能力を備えているという意味で自己言及的であり「相同的」であるいえる。よってこの自己言及的な領域的構造はゆらぎや乱雑さを排除するのでなく、それを含み込む柔軟性を備えており、「正のフィードバック」から秩序を形成する自己組織化の現象として現れるのである。そして領域的構造のある安定性から別の安定性への構造変動において、小さなゆらぎが変動の契機になる場合もあり、この変動は非決定論的で一義的に決定されることはない。

このような領域化は「歴史的」にみると漸進的(progressiva)な過程であるといえる。なぜならもはや意味を喪失し機能しなくなった古い人工物は、新しい領域的合理性の下で破壊されてしまうのではなく、別の意味を備えた機能によって再使用されるからであり、よって複数の領域的合理性が両立可能であ

る[72]。社会の下位システムに対応するこの異なった領域的合理性の間の関連は、自律的（autocentrata）と他律的（eterocentrata）という性質の異なる領域化する合理性の相互交代と共存／対立の結果として表わされる。前者は領域化を導く社会と具体的に領域化が実現される社会が文化－自然的に一致している場合であり、後者はそれが不一致で非対称的な場合である。例えば、植民地の場合に現地人による領域化の論理とは異なる論理が外部によってもたらされることで、領域内の行為者は他律的な立場になる。これは社会的合理性と領域的合理性のずれ－領域化の「過剰」あるいは「不足」－を端的に表わしている事例である[73]といえるが、ここで領域化の不足とは領域的振舞が複雑性を破壊したり、既存の領域形態が社会の新たな必要の足枷となっている場合を指している。

以上のようなトゥルコの議論において、《意味》による「構造化」という議論は少なくとも筆者にとって難解であり、特に自己言及的システムにおいて「歴史」をどのように考えたらよいかなど理解の及ばない点が多々ある。よってあくまでも素人考えであるが、「観察者」という特権的立場を否定し、人間の理性の限界を論理に組み入れようとする点、またそれぞれのシステムが自己の要素を再帰的に生産する動態を強調する点で、「オートポイエーシス」や「複雑性」をめぐる議論[74]は今までに論点を提示しているように思われる。

### (3) 「近代性（modernité）」[75]への認識

領域性との関連でラフェスタンが「近代性」をどのように認識しているのかを一瞥しておきたい。ある科学が「近代」という時代をいかに認識するかということは、その科学の「方法的立場」を確認する上で重要な問題である。なぜならそれは自らが内属し、そこで編制されている時代それ自体を、表象し「問題化」するという根本的に困難な営為であるという理由からである。この点に関して、上述のようにラフェスタンはひとつの「地理的文法」をイデオロギーとして位置付けており、それ自体が社会内部に含まれているメタ理論に安住しそれによってある認識を一方的に裁断する危険性への注意を促していると考えられる。ここであるシステムに参加しある行為をおこなっている当事者の立場

を「内的立場」として、それに反省を加えるメタレベルの立場を「外的立場」と呼ぶことにする。この外的立場からある行為を反省することが日常的におこなわれていることは明らかであるが、逆にこうした外的立場の認識が制度化－特権化されると同時に普遍化／無意味化されていることが、「近代」という時代の特質であるといえるのではないだろうか。外的立場をもひとつの立場として内包してしまう柔軟性によって、外的立場による批判それ自体が原理的に無効化されてしまうのである。

それではラフェスタンは「伝統」と「近代」の間の断絶をどのような点に求めようとしているのか。最も簡潔には、従来まで「労働」を構成していたエネルギーと情報という結びつきの分裂とそれに伴う認識と慣習的行動の間の切断の過程が、「近代」に特徴的な現象として確認されているように考えられる[76]。個人は常にある具体的世界において再生産されるが、この場合に「日常性」は我々の日々の不可避的な準拠であり、領域性はこの日常性を支える潜在的な関係のシステムであるといえる。この日常性の在り方を比較してみると、「伝統」では慣習的行動と認識が明確に区別されず、ひとつひとつの経験が蓄積され伝達されるのに対して、「近代」では認識が慣習的行動から区別され明示化されるようになる点で両者には大きな相違がみられるのである。

このような事態の一つの原因として、近代化の過程における労働の大規模な変容があったことは周知であろう。「技術的態度（l'attitude technique）」[77]の出現として捉えられるこの過程に関しては多くの重大な論点があるが、そのなかでも特にエネルギーと情報の分裂とそれに付随する集中化によって、例えば物質的労働－精神的労働、農村－都市といった多くの非対称的な分業関係が析出された点が重要であろう。情報の都市への集中と「普遍化」を担う知識人の登場、生産主義的合理性と市場の優越化、「機械化」の拡大といった事態は、一方で特定の人間に情報が集中し多くの人間を情報から遠ざけることによって、自らの労働を制御する力を喪失させ、人間を単なる「労働力」へと転化すると同時に、他方で制御を失った過剰なエネルギーの消費による自然への破壊的な支配を生み出すことになった[78]。また生産－消費という関係の分断化によって

労働時間と自由時間の区別が明確化され、労働世界において人間ともの（object）の関係が「機械」によって媒介されることで大量生産が可能になりまた要求されるようになった。同時にものの世界が「報酬」を媒介として自由時間と「余暇」に組込まれ、さらにはものが規格化され記号化されることで、ものそれ自体ではなくそれを「購入すること」への欲求が形成され、「自然」への回帰というイデオロギーも生まれるのであり、この意味で「労働者」と「消費者」の誕生のは同一過程における表裏一体の出来事であるといえる。[79]

こうした労働の変質に関連して、「伝統的社会」の場合に諸主体は日々の活動の全体であり、過去の積層されたものでもある現実的（réel）な準拠（reférential）によって目標を設定し対象と関係するのに対して、「近代社会」の場合に将来に実現されることへの予期である想像的（imaginaire）なそれによって関係する点で、時間観念について基本的な差異が認められる。[80]後者の場合に現在が前望的なものの現実化への意志に依存している点が注意されねばならない。つまり現在と未来という時間的なズレに賭けられて、今だ実現されていないまた実現されるという根拠もない可能性に留まるものを「信頼」することではじめて「現在」が現実化されるのである。そして未来の可能性に対する信頼に賭けられていることから逆に現在において全てが可能であると考えられるようになり、その結果として「発展」という考えが絶対的なものとして積極的に受容されることになった。

「労働」と「時間観念」をめぐる変化、それに関連する市場機構（自己秩序的経済）の出現が「地域」の変容と密接に結びついていることは明らかであろう。ここで「地域」とはある秩序の具体化を目指す情報の具体的空間への投射であり、大地と労働の結合に基づいて具体化されるものである。ところが市場機構の出現以後、このような「地域」はしだいに均衡といった市場の「抽象的」情報に依拠する自己－調整（auto-regula）によって外部から編制されるようになった。情報の質的内容の変化に伴って、位置のシステムに準拠する[81]交換価値が使用価値を規定するようになると、それ以前の「実質」を伴った具体的な「地域化された（regionalizzato）」領域－世代間の直接的な情報の伝達に基

づいた「伝統的具象物」を通して経験された諸関係から構成される領域－は稀にしか実現されなくなり、「非－地域化された」あるいは「一時的（temporalizzato）な」領域がより恒常的になる。ここで領域性は情報－記号と時間－とリズムの機能になり、情報量が一定ではなく常に変動することによって領域は不安定性を増し、「非領域化」と「再領域化」が絶えず反復されることになる。情報伝達の基盤となるコミュニケーションのネットワークの今日における例外的な発達は、「地域」の自律性を基盤付ける条件であると同時に前例のない文化的自律性の喪失の可能性の条件でもあるという両価性を帯びており、この二つの領域の相違は我々（地理学の不安定な地位も含めた）の経験を変容させ、「アイデンティティ」の在り方の再考をも促すことになる[82]。

このような議論を踏まえたうえで、ラフェスタンは情報を「機能的（fonctionnelle）情報」と「調整的（régulatrice）情報」に区分しその相違を重視する。前者は達成されるべき目標にむかってそれに適したものを生産するのに使用されるものであり、生産的合理性に関心が集中されるために、「他なるもの（l'Autre）」（物質的・人間的環境など）の破壊を不可避的に伴うような情報であるのに対して、後者は生産性にとどまらない全過程を把握するような情報であり、「負のフィードバック」ではないが、いわば行為者に自省作用を促すことで過程の一部を制御するような類の情報であり、自主管理（autogestion）にとって不可欠なものである。

こうした情報の区分に従うと、「近代」という生活様式が調整的情報よりも機能的情報に排他的な優位性を認めてきたことは容易に認められるであろう。再生可能な資源の利用低下と再生不可能な資源の破壊的利用は人間生活の「自律性」を脅かしており、調整的情報を復活させた第二の近代性を具体化させることが現実的課題となる。社会システムと環境の分離が環境に及ぼす影響を総体的に取り扱う学問である「人間生態学（écology humaine）」が、こうした問題に対して一定の視座を提供することは確かであるが、この視座は人間を自然との関係にのみ限定して論じる傾向のある「（自然）生態学的」視座と区別される必要がある[83]。なぜなら後者は多くの場合に問題を「生産力」に還元して

しまい、人間－社会の不均衡な関係への関心を希薄にしてしまう点で、ひとつのイデオロギーとして機能するからである[84]。

「情報」の役割をめぐって近年、多くの議論がなされていることは周知であろう。例えば、1970年代以降の資本制をめぐって、フォード主義からフレキシブルな蓄積過程への移行が進展するに伴って社会全体の生活様式が変貌しつつあるという認識が受け入れられるようになっている。特に情報技術などの革新に基づくコミュニケーション革命によって「時間－空間の縮圧（compression）」が生じ、場所間の差異が以前ほどの重要性を失い従来の地理学の立場の有効性が喪失されたとする主張[85]は、いくつかの点でラフェスタンらの議論につながっているといえよう。

ところでこのように情報を把握することは一定の有効性をもつと考えられるが、「調整的情報」への関心が社会的危機に対する生活レベルでの認識に依拠するものであるにもかかわらず、原理的にその情報がメタレベルにあることから問題を孕んでいるように考えられる。調整的情報に優位を与えねばならないという主張はひとつの判断であり、それが必然的に政治・倫理的な意味合いを持つ点が軽視されるべきではない。ラフェスタンはこの点に自覚的であるが、そうすると調整的情報の内実やそれを行使する主体あるい「目的性」といった概念の再検討が問われねばならないと考える。但しこのように問題を設定することは、それ自身がシステムのひとつに過ぎない科学が、諸システムについて考え得ることを前提とする特権的な発想を残している点で、むしろラフェスタンは筆者が考える問題点が論点にならないと考えているのかもしれない。

また上記のことと関連して「地域化された」領域へ戻ることが不可能であり、この領域に依拠して近代批判を行なうことが有効であるとは限らない点を確認する必要があるだろう[86]。ラフェスタンは西洋の歴史がなんらかの対象を作り出すことで破壊を伴う外在化（extériorisation）－対象化の原理に基づいてきたと考えており、この意味で「農耕」に始まる労働の暴力性を認めているが、前近代と近代を対比するあまりに前近代的労働が人間と大地との有機的関係を保っていたことを過度に強調し過ぎるように思われる。また「自律的な領域」

という考えのなかにはある「同質性」を前提としてしまう危険性が孕まれているが、こうした論点に関しては、「共同体」を近代において「喪失されたなにか」として位置づける「牧歌的」な発想を批判する近年の共同体論が参考になる。またこうした共同体論と必ずしも直接的に結びつかないが、地理学においてハーヴェイ(Harvey)が最近の「ロカリティ」研究への関心の高まりや新たな「共同体」の創成といった事態を、「世界都市化」や都市間競争の激化、国際的分業と労働力移動といった世界規模での蓄積体制と空間関係の変容に対応する現象であり、都市支配の強化を補完するものでしかないとして、「空間」と「場所」の弁証法的研究の必要性を強調していること[87]は示唆的であると考える。

近代批判を「労働」の変容とその帰結に焦点を絞って論じようとする「領域化」の地理学の試みは、多くの困難な論点を含んでいるが興味深いものであるように思う。但し今まで検討されてこなかったが、非対称的関係への注目の帰結としてひとつの重要な問題が残されている。それはいうまでもなく「権力」をめぐる諸問題である。

## Ⅲ 「領域(性)」と「権力」

「領域」を構成する諸関係は常に非対称的であり、それは同時にミクロ/マクロにおける無数の権力関係でもある。ラフェスタンは「権力」を国家とのみ同一視する傾向に陥った古典的な政治地理学の問題設定を批判的に再構築しつつ、権力を「政治」に限定されるものでも、また獲得される価値としての属性でもなく、むしろ全てのコミュニケーション過程において行使されるものとして認識し直す[88]。全ての関係が権力の多次元性(multidimensionnalité)を基礎づけており、権力はいわば関係に内在し遍在しているのである。このような立場が「権力」を「上から」なにかを禁止しまた何者かを抑圧するものとしてではなく、「下から」我々を何者かに作り上げるものとして把握するフーコーの権力論[89]に親近的であるのは明らかだろう。確かにこうした立場が超歴史的な権力の把握に陥る危険性も指摘されているが、ここではひとつの適切な出発点

としてとりあえず是認する。

「権力」を関係的な視点から再考する際に、行為者、その目的性、目的達成のための行為者の戦略、それに見合った／見合わない特定の空間－時間的な枠組（enveloppe）およびそれらを関係づける媒介－社会的コード－などがその構成的要素として問題になる[90]。行為者はその戦略に従って空間と時間において活動するが、コードの相違によって異なった空間－時間の構造化が行なわれることから、空間と時間は活動を支える条件であり、資源であり、またその賭け金（enjeux）でもある。

エネルギーが知（savoir）によって情報に返還される一方で、情報が力（force）からエネルギーを解放するという交互的な連関において、エネルギーと情報によって定義される権力は、根本的に「労働」という対自然、対人間の二側面に及ぶ革新（l'innovation）能力に根ざしている。労働は自然／社会環境において修正に直面した際に生き残るための唯一の保証である点で不可避的な力であるといえるが、それはほかの社会関係をも規定するのであり、Ⅱでみたように、エネルギーと情報の分離によって社会組織の内部に様々なレベルでの分裂（例えば具体的領域／抽象的領域）と集中という非対称的関係が生じることになった[91]。こうした事態は経済的な剰余価値の生産に加えて、「情報の剰余価値」の生産と蓄積という二重の過程の結果[92]であるが、この非対称的関係[93]は「ゼロ－サム」ゲーム的な関係ではなく、発信者と受信者とが容易には標定できないような多方向的なコミュニケーションの成立である。そして境界設定である網目、中心性の形成である結節点、循環を可能にするネットワークという領域の三つの不変的構造が、この非対称的な関係を具体的に形成し、新たな関係の出現の条件となる。

全ての関係を一義的に決定する「規範」や我々に記号の読解を可能にしてくれる社会的コードは、成文法のように実体的にあるのではなく、あくまでも事後的にしか見出されない[94]。しかしながら我々はその沈殿された蓄積とそれに対する信頼に依拠し、絶えず裁可（sanction）を受けまた行ないながら、選択的に非－コミュニケーションを可能なかぎり回避する[95]のであり、予測される

結果を予示することでコミュニケーションを支える社会的・象徴的コードもまた、行為者に間主観的な理解を可能にすると同時に反復可能な《同質化》を強いる点で、最も根本的な権力であるといえる。

このようなラフェスタンによる権力の把握に対して、トゥルコはルーマンの権力概念との類似性を見出す[96]。トゥルコは権力を「偶然性（Aleatorietà）によって特徴づけられる相互行為の場において固有の自律性を行使する行為者の能力（capacita）」として定義づける。権力は「複雑性」を縮減する行為者の能力のひとつであり、行為者が現実化する行為の可能性、つまりある行為者の振舞の予測不可能性が他の行為者に相対して制御される不確実性の範囲に関わる。このような不確実な相互行為の場において、権力の行使は行為者間の関係に対する一種の調整的な活動に他ならず、コミュニケーションの成功をより確実なものにする。上述したように社会的行為による領域的構造の創出は再帰的な過程であり、権力がこの再帰性を高めるうえで不可欠な役割を果たすことは明らかであろう。

したがって「私」を含めたシステムを成り立たせると同時にそれを何者かにしてしまう二重の力を有しているコミュニケーションおよびそれを支える力としての権力を我々がどこまで批判し得るかが重要な問題になる。

最後に「境界」と「国境」について社会的・象徴的コードの役割をめぐって、幾つかの事例をみておきたい。

バンヴェニストは、インドーヨーロッパ語のなかで「境界を直線で引くこと（regere fines）」という行為が神聖なものであったことを明らかにしているが、近代国家の出現はこうした「神聖なる行為」の大部分を無意味化し破壊してしまった。しかしながら国家儀礼の例をみるまでもなく、境界の認識を我々に再生産する過程において神聖なるものの残象とその再構成という象徴的コードの果たす影響力の大きさを無視できないが、従来の政治地理学においてはこうした論点が十分に意識されてこなかったといえる[97]。

また言語と領域をめぐる問題に関して、ゴバール（Gobard）によって区別される言語の四つの形式が注目される。(a) 日常的に使用されるヴァナキュラ

(vernaculaire) な言語、(b) 国家あるいは都市で利用され必要に応じて習得される伝達媒介的 (véhiculaire) な言語、(c) 過去の文化へ準拠することによってある価値の「連続性」を確実にする参照的 (referential) な言語、(d) 神聖さを表現する言葉の魔術としての神話的な言語の四つであるが、この形式は同時に共存しており、また時代を通じて諸関係のなかで変化する。例えば、都市は財の循環を制御すると同時に情報の循環も制御し支配するが、この結果としてヴァナキュラな言語は次第に縮小し、都市的な伝達媒介的言語が優位を占めるようになる。ラフェスタンはこうした過程を記号的側面での剰余価値の集中として捉え、経済的関係と相同的に論じている[98]。但し伝達媒介的言語が本来的に境界を越えていく性格をもつに対して、「国語」は擬制された次元ではあるが、ヴァナキュラな言語としての性格を体現するのであり、ラフェスタンの区分では都市的なものと国家的なものが一括されてしまい混同されている。「国語」といった言語はどこにも存在せず、現実には単に不均質な諸言語の連続体があるだけであり、この意味で国家の「言語地図」は多くの場合に「意識された虚構」であり、一定の政治的役割を演じることが忘れられてはならない。

## Ⅳ　おわりに－地理学的想像力をめぐって－

ラフェスタンらの議論は非常に多岐に及んでおり、ここでの検討はあくまでも部分的であり、非常に不十分なままに留まらざるをえなかった。残された論点や誤解した多くの点の訂正については他日に期したいと思うが、最後に「地理学的想像力」[99]という言葉をめぐる議論を一瞥することで小稿のおわりに代えたい。

ラフェスタンは、現実へ直接的に注意深く傾倒すると同時に、この現実へ距離を置き、別な仕方でそれを視る条件を与えねばならないという人文地理学の認識の特徴を地理学的想像力 (l'imagination géographique) －地理学的認識の生産－という言葉を用いて定位する。地理学には今までに三つの「神経症」－ヘロドーテの複雑さ・ニュートンのシンドロム・プロメテウスの情熱－が生じ、それが並存してきた。第一は視ることに優位を与える問題設定であり、世

界に関する現実的認識の蓄積に関心を寄せる古典地理学の想像力を指す。これに対して第二は形式化と数学化によって「不可視なもの」を認識しようとする努力であり、諸科学（特に物理学）からの豊かなアナロジーの開花をみた理論地理学の想像力を指す。そして第三はグローバルな説明を志向する想像力であり、包括的な「批判」を意図するマルクス主義と「小説家（romancier）」の二つの問題設定に関係する。特に後者は関係的な構造を呈している「日常的なもの」に関心を寄せており、領域性のパラダイムと親近性を有している。

それでは領域性概念との関わりにおける地理学的想像力とはどのようなものであろうか。それは「日常」に含み込まれ沈殿している諸事物に対して、「側面的な読解（lecture laterale）」[100]を行なうことである。この想像力は「問題を消去するためではなく、豊かにするためにあり」、マクロ次元とミクロ次元のつながりを見出すことでこうした区別それ自体を無効にし、さらには我々の慣習的諸行動を暗黙のうちに支えている不在のコードや関係を「徴候的」に読み取ることを可能にする。そしてそれは〈科学的な知〉ではなく、〈民衆的な（populaire）知〉に由来する反－言説的な情報を具体化していくことでもある[101]。このような想像力に支えられる「日常性」への批判的関心は、諸集団の力関係の結果として生産された社会生活における空間と時間の観念について、その集団のひとつである「地理学者」と呼ばれる人々の活動をも対象に含んで批判的な考察を試みるハーヴェイの歴史地理学的想像力[102]に呼応するものであり、こうした方向性において現在を可能態のひとつに相対化する手続きとして、新たな意味と広がりをもった「日常性」批判が再構築されうるわずかな可能性があるのではないだろうか。

**《注》**

1）領域性概念のすぐれた展望として、上田　元「領域性概念と帰属意識」，人文地理38，1986,193-211頁がある。また旧西ドイツでの領域性（Territorialität）に関しては、石井素介「西ドイツにおける「地域」概念の社会的基盤－地域主義・地域意識研究への道」，駿台史学72,1988,35-81

頁や Bartels, D., Menschliche Territorialität und Aufgabe der Heimatkunde. (Riedel, W., Hrsg., *Heimatbewusstsein*. Husum, 1981), pp.7-13. などを参照。

2) ジルベール(Gilbert)は「再構築された地域地理学(Reconstructed regional geography」における地域概念を、(a) 資本制的過程におけるローカルとしての地域、(b) 同一化の核としての地域、(c) 社会的相互行為の媒介としての地域の三つに区分し、(b)に人文主義的研究を、(c)にラフェスタンやスリフト(Thrift)らの研究を含めている。Gilbert, A., The new regional geography in English and French-speaking countries. *Prog. hum. geogr.* 12, 1988, pp.208-228.

3) 自然科学からのアナロジーに対して、例えばセイヤー(Sayer)は社会科学における数学の利用について、数学が多くの場合に対象間の関係が対象それ自体にとって「外的」である「アトミズム」に立脚していることから一定の留保を置く。そして歴史的過程の説明のために関係が「内的」である関係的世界観に立脚する必要性を論じている。またバーンズ(Barnes)は物理学的メタファーから生まれた「経済人(Homo Economicus)」など普遍的合理性に依拠した諸概念の本質主義(essentialism)に疑問を呈し、理論の「コンテクスト性」を主張する。筆者もこうした見解に賛成であるが、「適切」なアナロジーの創造的有効性は認められねばならないと考える。Sayer, A., Mathematical modelling in regional science and political economy:some comments. *Antipode* 10, 1978, pp.79-86. Barnes, T., Homo Economicus, Physical Metaphors, and universal modeles in economic geography. *The Canadian Geographer* 31, 1987, pp.299-308.

4) Raffestin, C. et Bresso, M., *Travail Espace Pouvoir*, 1979, L'Age d'Homme, p.33., Raffestin C., La territorialité mal aimée et/ou mal comprise ou les avatars d'une notion mal aimée et/ou comprise. *L'Espace Géographique* 12, 1983, pp.305-306.

5) Raffestin, C., Les notions de limite et de frontière et la territorialité. *Regio Basiliensis* 21, 1981, pp.119-127.

6）ホール（日高敏高・佐藤信行訳）『かくれた次元』, 1970, みすず書房。モル・ロメル（渡辺　淳訳）『空間の心理学』, 1983, 法政大学出版局, 299頁。

7）Raffestin,C.,Problématique et explication en géographie humaine.,(Groupe Dupont.*Geopoint 76*,1976),p.85.

8）Ibid.,pp.81-96.

9）合衆国において地理学内での概念の精緻化が目指されるのではなく、旧来の問題設定のままで外部から概念を借用するに留まる兆候が指摘されている。Raffestin,C.,Les construits en géographie humain:notions et concepts.(Groupe Dupont.*Geopoint 78*, 1978),pp.55-73.

10）① Raffestin,C.,Paysage et territorialité.*Cahiers de Géographie du Québec* 21,1977,pp.123-134.

② Racine,J-B.et C.Raffestin,Des réponses à Michel Foucault,*Hérodote* 6,1977,pp.15-19.なおフーコーによる権力と真理の共犯的関係性の指摘がこの三角関係の下敷きにされていることは明らかであろう。フーコー「真理と権力」『ミッシェル　フーコー』, 1986, 新評論, 72-98頁。

11）分析哲学における指示対象(reference)の「プラグマティズム的転回」の意味と地理学への影響に関しては、Rose,C.,The problem of reference and geographic structuration.*Society and Space* 5,1987,pp.93-106.:Toward pragmatic realism in human geography.*Cahiers de Géographie du Québec* 34,1990,pp.161-179.を参照。

12）D. Gregory, *Ideology, Science and Human Geography*, Hutchinson, 1978, pp. 25-48.

13）Farinelli, F., Pour une théorie générale de la géographie. *Georythmes*, 5, 1989, pp. 68-79.なおフランス学派、計量地理学、人文主義地理学の関係をめぐる別の見解としては、Gregory, D., Human agency and human geography. *Trans. Inst. Br. Geogr. N. S.* 6,1981. pp. 1-18を参照。

14）Racine,J-B.et Raffestin,C.,Des directions (encore) nouvelles pour la géographie moderne.*Annales de Géographie* 87,1978,pp.182-194.

15) Racine,J-B.,Discours géographique et discours idéologique:perspectives épistémologique et critiques.*Hérodote*,6,1977,pp.109-159.

16) Ferrier, J-P., J-B. Racine,et Raffestin,C.,Vers un paradigme critique:matériaux pour un projet géographique. *L'Espace Géographique* 7, 1978, pp. 291-297.

17) op.cit.7).pp.93-96.

18) 立場は異なるがレイは、外部者(outsider)の視点である地図化に対して内部者(insider)による理解(verstehen)の必要性を主張しており、地理学における知覚研究が地理学者に自らの精神的カテゴリーや認知的態度への反省を促す契機になったことを指摘している。Ley,D.,The personality of geographical fact,*The Professional Geographer* 29,1977,pp.8-13.

19) Racine, J-B.et Raffestin, C.,L'espace et la sociéte dans la géographie sociale francophone:pour une approach critique du quotidien. (Paelinck, J.H.P.et Sallez, A., *Espace et localisation*.Economica,1983),p.320.

20) Bailly,A.,Raffestin,C.et H.Reymond.,Les concepts du paysage: problématique et représentations.*L'Espace Géographique* 9,1980,pp.277-286.

21) Raffestin, C., Écogénèse territorial et territorialité, (F. Ouriac et R. Brunet, L'espace:Jeu et Enjeu, La nouvelle Enciclopedia Fondation Diderot, 1987), p. 176., op, cit. 11).

22) ラクラウ・ムフ(山崎カヲル／石澤　武訳)『ポスト・マルクス主義と政治』, 1992,大村書店, 173-174頁。

23) Racine, J-B., De l'etre et du phenomene dans la pratique de la géographie. *Georythmes*, 4, 1986, pp. 7-23.

24) ダルデルが「認識されることの確かさを生きられることの快楽に従わせようとしている」とラフェスタンは判断する。Raffestin,C.,Pourquoi n'avons-nous pas lu Eric Dardel., *Cahiers de Géographie du Québec* 31,1987,pp.471-481.

25) Raffestin,C.,Théories du réel et géographicité.*Espaces-Temps* 40-41,1989,

p.29.

26) メルロ＝ポンティ（竹内芳郎監訳）『シーニュⅠ』，みすず書房，1969,193頁。

27) op.cit.10) ①、Raffestin,C.,Du paysage á l'espace ou Les signes de la géographie.*Hérodote* 9,1978,pp.90-104.; Raffestin, C., Introduzione. (Raffestin, C. cura, *Geografia Politica:Teorie per un progetto sociale.* 1983, Unicopli),pp. 11-18.

28) この立場は認識の対象と現実の対象の区別からアルチュセールが引き出した「理論的実践の理論」に依拠していると考えられる。この理論では、第一の一般性である原材料（既存の理論や観念）が第二の一般性である労働手段（労働者と道具）によって変形され、その結果として第三の一般性である科学的生産物が生産される（アルチュセール（河野健二・田村俶訳）『甦るマルクスⅡ』1968，人文書院，84-97頁、同（西川長夫訳）『自己批判』，1978，福村出版，150-161頁)、またこれに対する批判としては、Smith,N.,Symptomatic Silence in Althusser: the concept of Nature and the unity of Science.*Science and Society* 44,1980,pp.58-81.を参照。なおここでの「生産」を「生産一般」と同一視することは誤りであろう。

29) op.cit.27)1983,p12.

30) Raffestin, C., L'imagination géographique, J-B. Racine et C. Raffestin, eds., *Geotopique*, 1983,p.31.

31) プリエトによると「イデオロギー」は物的現実の認識をその対象であるものからの必然的結果として説明したりまたそう思わせたりする全ての言説とされる。プリエト（丸山圭三郎・加賀野井秀一訳）『実践の記号学』，岩波書店，1984,222-224頁。

32) 前掲31)210頁。

33) op.cit.19)p.320。

34) Hussy,C.,*Genève, étude régionale*.Peter Lang,1979,p. 3.

35) Ibid.p.22.

36) Giddens, A., *The Constitution of Society*, 1984, Polity Press, pp. 284-285.

37) op.cit.4) pp. 43-52.

38) 例えば景観概念が地理学において多くの場合に地表の一部分を指すに留まっていることを批判し、景観が本質的にはイデオロギーや戦略などより多く内容を含意しているとするラコスト(Lacoste)の主張、景観を秩序とイデオロギーがそこから生成される場所として、言説の問題として把握し直そうとしているダンカン(Duncan)らの「社会地理学」の立場は、ラフェスタンの議論と部分的に交差していると思われる。Lacoste, Y., A quoi sert le paysage?, Qu'est-ce un beau paysage?, *Hérodote* 7, 1977, pp. 3-41.; Duncan, J.S., Individual action and political power. (R.J.Johnston ed., *The Future of Geography*, 1985, Croom Helm), pp. 174-189.

39) op.cit.10) ①pp. 125-133.

40) Ibid. pp. 125-129, op.cit.25) pp. 27-28.

41) Ibid. pp. 126-127, op.cit.4) pp. 14-15.

42) Raffestin, C., Territorialité:Concept ou Paradigme de la géographie sociale?., *Geographica Helvetica* 41, 1986, pp. 91-96.

43) Raffestin, C., *Pour une géographie du pouvoir.* Litec, 1980, p. 129.

44) Raffestin. C., Remarques sur les notions d'espace, de territoire et de territorialité. *Espace et Sociétés* 41, 1982, pp. 167-171.

45) op.cit.4) p. 10.

46) 遺伝子型と環境が決定する生物の形態・生理上の特性である。

47) op.cit.21) pp. 176-177.

48) マルクス／エンゲルス（廣松渉編訳）『ドイツ・イデオロギー』, 1974, 河出書房新社, 23-25頁、マルクス（城塚登・田中吉六訳）『経済学・哲学草稿』, 1964, 岩波文庫, 208頁。

49) op.cit.21) pp. 177-181.

50) op.cit.4) pp. 19-30.、アタリ（平田清明・斎藤日出治訳）『情報とエネルギーの人間科学』1983, 日本評論社, 51-106頁。

51) セール（及川馥・米山親能訳）『パラジット』, 1987, 法政大学出版局, 155頁。ラフェスタンは関係や情報への着目という点でセールの哲学に深い関心を寄せている。Raffestin,C.,Reflexions sur Le Parasite.*L'Espace Géographique* 11,1982,pp.15-16.

52) op.cit.19)pp.325-327.他の論文では「他者性(l'alterite)」が「外部性」と対になって問題にされている。この論文では他者性は外部性に包含されているように思われるが、他の論文との関係や他者性が削除されている理由はわからない。

53) op.cit.21)pp.181-183.,43)pp.135-143.

54) この点で例えばドイツ社会地理学の社会的休閑(Sozial Brache)の概念が評価される。op.cit.42).pp.92-93.

55) Raffestin,C.,Punti di riferimento per una teoria della territorialità umana. (Copeta, C., cura. *Esistere e Abitare, Prospettive umanistiche nella geografia francofona*. Franco Angeli, 1986),pp.75-89.

56) 例えば、Storper,M.,The spatial and temporal constitution of social action: a critical reading of Giddens. *Society and Space* 3, 1985, pp. 407-424., Werlen, B., Thesen zur handlungstheoretischen neuorientierung sozialgeographischer forschung. *Geographica Helvetica* 41,1986,pp.67-76.などを参照。

57) Racine,J-B.,Raffestin,C.et Ruffy,V.,Echelle et action,contribution á une interpretation du mecanisme de la l'echlle dans la pratique de la géographie.*Geographica Helvetica* 35,1980,pp.87-94.

58) op.cit.19)pp.321-324,34)pp.39-54.

59) Racine,J-B.,Formes spatiales et transaction social:vers une explicitation du rapport general du social à la matérialité.*Rivista Geografica Italiana* 89,1982,pp.502-526.

60) ド・セルト（山田登世子訳）『日常的実践のポイエティーク』, 1987, 国文社, 特に199-265頁。

61) Turco, A., *Verso una teoria geografica della complessità*. Unicopli, 1988, pp.

15-18.

62) ゲーレン（平野具男訳）『人間』，法政大学出版局，1985,67-79頁。

63) Turco, A., Géographie, ordre symbolique et cycle de l'information., J. P. Guérin et Gumuchian, H., *Les Représentation en Actes*. 1985,pp.71-83.

64) op.cit.61)pp.32-49.ルーマン（馬場靖雄・上村隆広訳）『目的概念とシステム合理性』，勁草書房，1990,340頁。

65) Ibid.pp.52-55.

66) Ibid.pp.79-93.

67) 野家啓一「言語と実践」『新岩波講座哲学２　経験　言語　認識』，岩波書店，1985,139-171頁。

68) op.cit.61)pp.93-105.

69) Ibid.pp.106-134.

70) ルーマン（佐藤嘉一訳）「社会学の基礎概念としての意味」『批判理論と社会システム理論　上』，木鐸社，1984,29-79頁。

71) Turco,A.,Le sens est-il un concept pertinent en géographie de la perception, *Bulletin de la Société Neuchâteloise de Géographie* 27, 1983, pp. 361-378.

72) op.cit.61)pp.135-142.

73) Ibid.pp.142-161.なおトゥルコはセネガルを対象にして、現地人、イスラム化、ヨーロッパ人の商業的論理と植民地化という4つの領域化する合理性の関連を検討している。

74) オートポイエーシス概念を社会システムに適用することには意見が分かれている。例えば今田高俊『自己組織性』，創文社，1986,59-61頁、河本英夫「解題」（マトゥラーナ／ヴァレラ『オートポイエーシス』，1991，国文社），248-314頁。また経済学における複雑性の議論に関しては、塩澤由典『市場の秩序学』，筑摩書房，1990,3-39頁などを参照。

75)「近代（性）」とは歴史的な時代区分であるよりもむしろ「ヨーロッパ」に18世紀から生じたひとつの「生活様式」全体を意味する。

76) op. cit. 4)pp. 87-94., Raffestin, C. et Bresso, M., Tradition, modernité. terri-

torialité. *Cahiers de Géographie du Québec* 26, 1982, pp. 186-198., Crivelli, R., La quotidiantià. (Copeta, C., cura. *Esistere e Abitare, Prospettive umanistiche nella geografia francofona.* Franco Angeli, 1986), pp. 90-107.

77) op.cit.4) pp.89-92.

78) 環境問題に関して外部不経済を経済的価値で計算しそれを生産費に組込むといったような従来の経済学的な解決方法が批判され、社会のコード（対人間・対自然）の全面的な修正の必要性が論じられる。Bresso, M. et Raffestin, C., L'économie de l'environnement:idéologie ou utopie?, *L'Espace Géographique* 8,1979,pp.85-92.

79) op.cit.4) p.30.pp.123-141.また余暇とツーリズムの発生および場所との関わりについては、Raffestin, C., Nature et culture du lieu touristique. *Méditerranée* 58,1986,pp.11-17.を参照

80) op.cit.76) 1982.

81)「生産者は中身を賭ける。パラジットは位置を賭ける。生産者は常にパラジットに打ち負かされる。」op. cit. 51) 前掲62頁、Raffestin, C., Territorializzazione, deterritorializzazione, riterritorializzazione e informazione. (Turco, A., cura. *Regione e Regionalizzazione.* Franco Angeli, 1984), p.75.

82) Ibid.pp.69-82,op.cit.4) pp.143-151.また吉見俊哉「メディア変容と電子の文化」思想817,1992,16-30頁も参照。

83) Raffestin,C.,Plaidoyer pour une écologie humaine.*Archives suisses d'anthropologie générale* 44,1980,pp.123-129.

84) Smith,N.,*Uneven Development*,Basil Blackwell,1990,pp.1-31.

85) 但しハーヴェイは場所の微妙な異質性がフレキシブルな資本蓄積にとって重要性を増していることを指摘する(Harvey,D.,The Geographical and Geopolitical Consequences of the Transition from Fordist to Flexible Accumulation. (G. Sternlieb and J. W. Hughes eds., *American's New Market Geography*, 1988, Rutgers University), pp. 101-134.)。

86) したがって「生活世界」と「システム」を対立させ、後者による前者の植

民地化（貸幣化と官僚化）を批判する立場は一面的であろう。Gregory, D., The crisis of modernity?, Human geography and critical social theory. (Peet, R. and Thrift, N. eds., *New Models in Geography* Ⅱ, 1989, Unwin Hyman), pp. 348-385. を参照。

87) Harvey, D., From Managerialism to Entrepreurialism: The Transformation in Urban Governance in Late Capitalism. *Geografiska Annaler* 71B, 1989, pp. 3-17.

88) Raffestin, C. et Turco, A., Espace et pouvoir. (Bailly, A., ed., *Les concepts de la géographie humaine.* Masson, 1984), pp. 45-50.

89) フーコー（渡辺守章訳）『性の歴史Ⅰ知への意志』, 新潮社, 1986, 101-203頁、同「主体と権力」思想718, 1984, 235-249頁。

90) op. cit. 43) pp. 26-56.

91) Ibid. pp. 46-50., op. cit. 4) pp. 10-14.

92) Raffestin, C., Marxisme et géographie politique. *Cahiers de Géographie du Québec* 29, 1985, pp. 271-281. なおこうした区別はギデンズの配分的(allocative)資源と権威的(authoritative)資源のそれに類似する。op. cit. 36) pp. 258-262.

93) こうした関係をグレマスの「記号の四角形」から、対立、矛盾、伴立といった言葉を借用して演繹的に形式化することが試みられている。Raffestin, C., Potere e territorialità. (Raffestin, C. cura, *Geografia Politica: teorie per un progetto sociale.* Unicopli, 1983), pp. 63-70.

94) Raffestin, C., Peut-on parler de codes dans les sciences humaine et particulierement en géographie?. *L'Espace Géographique* 5, 1976, pp. 183-188.

95) 前掲67)。

96) op. cit. 61) pp. 49-52., : Territorializzazione progressiva, complessificazione, reversibilità: concetti per une teoria geografica del potere (Raffestin, C., cura., *Geografia Politica: teorie per un progetto sociale,* Unicopli, 1983). pp. 39-54.

97) Raffestin, C., Religions, relations de pouvoir et géographie politique. *Cahiers de Géographie du Québec* 29, 1985, pp. 101-107.

98) Raffestin, C., La Language comme ressource:pour une analyse économique des langues vernaculaires et véhiculaires. *Cahiers de Géographie du Québec* 22,1978,pp.279-286.

99) op.cit.30)pp.25-42.

100) Ibid.p.40.またベンヤミン「歴史哲学テーゼ」『ベンヤミン著作集 1』, 晶文社,1969,114-119頁も参照。

101) op.cit.10)②.

102) Harvey,D.,Between Space and Time:Reflections on the Geographical Imagination.*A. A. A. G.* 80,1990,pp.418-434.